

第 66 回神奈川県高等学校美術展 総評

令和元年 12 月 9 日、高校生の熱気で溢れる県民ホールギャラリー。令和の高校美術展が始まりました。出品総数 746 点は例年並みの出品規模となりました。日頃より指導に当たられた先生方にはいつもながら感謝申し上げます。

今年も出品規定上限の大きさを生かした大作が、平面、立体共に目を惹きました。これはただ作品の大きさだけでは表現できない、造形力の素晴らしさだと思います。S50 号の油絵ともなれば、ただ好きだからで描ききれものではありません。確かな構成力と描写力が必要となってきます。表現力豊かな秀作は、残像として目の中に残ることができ鑑賞者の心にまで届きます。等身大の塑像や大型の陶芸作品等にしても、1, 2 週間で、完成を見るものではないはずです。高度な技術と確かな計画性が求められます。また陶芸や、彫刻、版画などでは、顧問の先生からの技術指導や、部活内での先輩から後輩への技術伝達が欠かせない所です。この出会いは財産ですので、ぜひ大切にしてください。表紙原画部門と、ポスター原画部門は部門として定着しており、各学校で先輩から受け継いだ表現技法や色彩感覚は学校の伝統となっているように感じます。映像メディア部門は新たな表現方法として、高校生に支持を受けています。映像作品は SNS 等の中にも溢れています。その分伸びしろが、感じられる部門でもあります。この反面、世の中にはオリジナリティーに欠ける作品も少なくありません。高校美術展では、今後若い感性を生かしたオリジナリティー豊かな作品を期待しています。そして今年全部門の作品を通じて感じたことは、「闇」という言葉でした。世界情勢の不安、政治不信、先行き不透明な大学入試改革、複雑化する人間関係等、高校生を取り巻く環境や将来に対する不安感からくる「闇」なのではないでしょうか。このメッセージを、私たち大人は、しっかりと受け止めなければなりません。

高校生のみなさん、今後世の中で、生きていくのに必要な能力はコミュニケーション力とされています。その中で、仲間との協働による課題解決力や新たな価値を創造する力が求められます。この諸能力は、日頃の美術部の活動を通じて鍛えられているはずです。また自作品と対峙することは、自分創りの旅に出ることと等しいと考えています。

また来年新しい自分に会うために旅に出ましょう。そして第 67 回高校美術展という旅先で再会を誓いましょう。

審査委員長 宮地広